

サエコがぬれた傘を連れて部屋へ戻ってきたとき、レイは十分間の有酸素運動のトリである絨毯と一体化したのち天井をクラップする動作をおえたところだった。頭をからにするルーティーン。散らかった机を綺麗にするのではなく、その上からそれなりに白いタオルを覆いかぶせるような。

「お水」とサエコがケトルから洗ったばかりのマグに水をいれてくれた。

「ありがとう」レイは冷えた白湯をのみほしながら、自分がただの水をそれほど好きではないのは、それが味の無い液体だからか、それともまだ美味しい水をのんだことがないからなのかと、からにしていたはずの頭で考えた。もし美味しい水というものがあるのであれば、自分も半日で二リットルも消費するような人間になるのだろうか。それはもし誠実な政治家というものがあるならば、人々はもはや政治に参加しなくなるだろうといった駄弁と同じようなものなのだろうか。

把手を軽く持ちあげてケトルに火をかけながらレイは下着だけをするりと取り外し眼鏡を鹿の皮みたいな色をした布で拭いているサエコに聞いてみる。「今日はどうだった？」

「忙しかった。アプリケーション関連で。」とサエコはいう。

「パソコンの？」

「研究費の。」

「ああ、そう。」とレイは特に後追いの質問はせず、自分もまあまあ忙しかったと報告する。レイは彼女の生業については政府系の研究所にいるという以上詳しくは知らないし、知っていたとしても、そんなことはどうだってよかった。これまで彼女と何かについて議論することはなかったし、プラスチックは必ず分別して、ラテ好み、という以上に彼女の信条を知ることになった。午前中は《世界中のニュース》をあたかも我が家の冷蔵庫の中身のように語る人々をデリートするのに忙しかったレイにとって、サエコとの暮らしは癒しでさえあった。

今窓の外に見えるのがだれかの涙だったとして、どうしてそれを自分が気にしないといけないのだろうか。

「焼くのもやろうか？」と新しくコーヒーを淹れてから、朝から調味料漬けにしておいた豚肉についてサエコにきく。「いいよ、すぐ出来るし。ちょっと気分転換したいしね。」と彼女は濡れタオルで丁寧にふいたコートをかけると、さっそく韓国料理の完成にとりかかった。フリーに轉身してから曜日感覚を失ってきたレイにとって、アジアン・サーズデイ（アジア料理をたべる木曜日）は一週間ももうあと少し、という世間とのつながりを思い出させるささやかなイベントごとだった。

《明日は土曜日》という文言の持つ国際的アピールはよくよく考えると異常なほどだ。中国が眠るころアメリカは目覚め、ドイツに雪が降るころオーストラリアは波乗りをする。それなのに、どうして世界に週末は金曜と月曜の間にしかないのだろうか？もし《明日は水曜日》という国が発見されたら、そのときはレイもニュースサイトにかじりつくことだろう。もし、そもそもそんなことを調査している物好きがいれば、の話なのだけれど。